

# 化学物質問題、政策への関心

## これまでとこれから

2006年6月13日

主婦連合会

有田芳子



# PRTR、GHS、リスクコミュニケーション

- 1997年7月国際シンポジウム
- 神奈川県PRTRパイロット事業
- 1999年コープかながわと日本生協連で  
化学物質のリスクコミュニケーションワーク  
ショップ、学習会
- 2000年OECD化学物質のリスクコミュニ  
ケーションワークショップ(ベルリン)
- 2003年GHSに関する市場調査
- GHS市民意識調査

# しゅふれん

ようこそしゅふれんのホームページへ



1948(昭和23)年に創立した全国組織の消費者団体。  
変動する社会の中で、消費者の権利を確立するために行動しています。  
事務局は、JR四ツ谷駅前の、主婦会館プラザエフの3階にあります。  
ぜひ、お立ち寄りください。

「しゅふれん」は、**主婦連合会**の略称です

## 主婦連(しゅふれん)とは...

主婦連合会の略称で、消費者の団体と個人の連合体です。

主婦連合会は1948(昭和23)年9月3日に設立しました。  
会の目的は「消費者の権利を確立し、いのちとくらしを守るために必要な活動をする」ことです。

ちなみに1956(昭和31)年、主婦連合会と日本生活協同組合などで全国消費者団体連絡会を作りました。



## 私たち(主婦連合会)の活動

- ・ロビー活動
- ・申し入れ、意見書・要望書の提出
- ・学習会
- ・アンケート調査
- ・企業との懇談、企業報告書の評価
- ・相談
- ・ホームページでの活動紹介
- ・機関紙発行





## 〈化学物質の内分泌かく乱作用(いわゆる環境ホルモン)今後の課題〉

2005年8月1日

環境庁(当事)がSPEED'98で内分泌かく乱作用(いわゆる環境ホルモン)が疑われるとした67物質(その後66物質に変更)のリストを廃止し、化学物質の内分泌かく乱作用(いわゆる環境ホルモン)に関する新たな方針を打ち出した。

しかし、今回リストが廃止されたことについては、当然ながら利害関係者間の評価は様々である。そもそも、あのリスト自体の作成が誤解を生むものであったのだから廃止は当然で、あのリスト作成について誤りだったことを明言すべきだという専門家がいる。また、当時は緊急避難的に調査する必要があり、リストの意義はあったが、現段階でこだわる理由はないとする研究者もいる。そして、リスト廃止は、内分泌かく乱作用問題への対応方針の後退ではないかと疑問を投げかける市民団体もある。

私自身は、その時点での限られた情報の中からリストアップして示したことは、内分泌かく乱化学物質への速やかな対応や取組みの大きな推進力となり、リストによって化学物質に関心が高まる効果もあったと考えている。しかし、リストの化学物質のみに関心が集まり、その後消費者の化学物質への関心が継続したかといえば疑問視するしかない。

リストは廃止されたが、試験を終了するわけではなく、今後は全化学物質を対象に国内での使用実態や、国際機関等の公的機関が公表した報告書等で影響などが懸念された物質等を対象とすることになった。また、試験結果の解析・評価については公開で十分議論できる場の確保も約束された。今後の課題として、リスクコミュニケーションの確立があげられる。科学者の中には、リスク評価ができていない状況では、リスクコミュニケーションは出来ないと答える科学者がある。しかし、「リスク評価」の結果だけ説明されるのでは、都合のよいことだけ知らせるのではないかと疑心暗鬼を起こしてしまうだけになる。「安全です」とか「危ないです」と言うのではなく、「どの程度の確率でこのリスクが起る可能性があるか」、その場合、「そのリスクによる影響の大きさはこの程度である」などを明確に示して欲しい。

リスクコミュニケーションを進めるためには、専門家が個々の研究分野における研究内容を分かりやすく「伝える」能力を向上させることや、市民・消費者が何に不安を感じ、何に疑問を覚え、何が分からないのかを理解するための「傾聴」する能力を、身につけることであると思われる。結果、市民・消費者の冷静な問いかけと理解を引き出すことにもつながるのではないだろうか。また、利害関係者の疑問や意見を真摯に聴く態度や努力が、分かりやすく説明することにつながり、また、そのような態度は信頼につながる。

今後は、リスト廃止の経過や研究の状況などもコミュニケーションの対象として欲しいと思っている。(Y.A.) 6



( 記事から一部抜粋 )

人の健康や生態系に有害なおそれがある化学物質について、環境中へ排出した量や、廃棄物に含まれて事業所からでた量を、事業者が自ら把握して国に報告し、国は事業者からの報告や統計資料を用いた推計で公表するP R T R制度も、法が施行されて今年で第3回目の集計結果が公表されました。アメリカなどでは、同様の制度に市民が関心を持つことで、化学物質の削減効果があったようですが、日本では未だ一部の関心でしかないようです。そのような中、化学物質が人や生態系へ与える悪影響の課題も引き続き残されています。(中略)

### ( 3 ) 第三次環境基本計画今後のスケジュール

7月19日第三次環境基本計画策定に向けた考え方(計画策定に向けた中間とりまとめ)が公表されました。8月には、各種団体との意見交換が行なわれ、主婦連合会も意見を述べました。また、中間とりまとめにパブリックコメントも出しました。今後の第三次環境基本計画の原案作成のながれは次のようになります。引き続き、意見を反映させていくことが重要です。

## 〈機関紙「主婦連たより」2005年9月掲載〉

リスクコミュニケーションその1「正しく使えば便利（ベネフィット）使い方を間違えると危険度が高くなる（リスク）」

### ディート(ジエチルトルアミド)昆虫忌避剤(虫除け剤)について

1. 8月初旬まで、テレビで放送された虫除けスプレーのコマーシャルがありました。  
(横浜市中区に本社のあるジョンソン社。ジョンソン&ジョンソン社とは別会社) その映像は、小さな女の子に虫除けスプレーを胸の辺りで噴霧しているものです。赤ちゃんにも安全ですと書いてあるので、皆さん安心してこのような使用をしているのではないのでしょうか。しかし、噴霧式のものの表示には、いったん手に吹き付けてから、首などに付けてくださいというような表記がしてあります。  
虫除け剤は、大変便利なものですが、カナダなどでは厳しく規制されているものです。
2. ディート(ジエチルトルアミド)は安全ということで、一般的に信じられています。しかし、重度の神経障害や皮膚炎などを起こすことも分かっています。直接皮膚に使用する薬物なので、製品の注意書きをよく読んで守るようにすることや、手足以外などの衣服の下には使用しないなどの注意も必要です。  
ディートは、他の農薬などと同時に使用すると、重度の神経障害を招くことも知られています。
3. アメリカの防疫センター(CDC)や米環境保護庁(EPA)では障害の予防のために使用法を次のようにしています。
  - ・忌避剤は露出している皮膚や衣類に使用すべきで、衣類のしたには使用しない。
  - ・切り傷や、炎症のある皮膚などに決して使用しない。
  - ・眼、口には使用しない。耳のまわりは控えめに使用。スプレーを使う場合、顔に直接吹き付けしないで、最初に手にスプレーしてから顔につける。
  - ・子供に扱わせない。子供の手に使用しない。子供に使う場合、大人が手に塗り子供に塗るようにする。子供は、眼や口に触れると思われる。
  - ・密閉された場所でスプレーしない。また、食品近くでも使わない。
  - ・たくさん使用することやしみ込ませることは、効果のためには必要ない。1回の使用で4～8時間の効果がある。たくさんかけても効果は増加しない。
  - ・室内に戻ったとき、使用した部分を石けんと水で洗うか入浴すること。また、衣類も洗濯してから、着ること。



\*日本の忌避剤は、外国のものより濃度は低いのですが、幼児に使用の場合は、大人が手にとって使う。

顔と手に使わない。

長期使用は避ける。1日に3回以上は使わないなどに注意すべきです。

（機関紙「主婦連たより」2006年6月掲載）  
シリーズ：化学物質何ジャ問ジャ その1.基礎から学ぼう



新しい国際的な化学品の分類と表示や、化学物質の管理と環境保全のための法律の見直しの動きが始まっています。化学物質と聞くと、何か難しくて私には関係ないわと思いませんか？今回から、化学物質に関するミニ知識や、化学物質に関する法律、地球規模から身近で起きている問題まで、様々な化学物質と環境について考え、問題提起をしていきたいと思えます。

今回は、私たちの生活と化学物質について考えて見ましょう。「化学物質」という言葉は、いろいろな説明のしかたがありますが、私たちの身の回りのものは、全て化学物質でできています。化学物質を化学的に分解すると、それ以上簡単には分解できない「元素」とよばれる物質になります。二つ以上の元素が組み合わさってできている物質を「化合物」と呼んでいます。

元素は、例えば水素（H）、酸素（O）、炭素（C）等があります。それが、化合物となると「水」は水素、酸素で、「ブドウ糖」は炭素、水素、酸素などでできています。そして、人間の体も化学物質でできたものの集まりです。

私たちの身の回りにあるものは、111種類の元素から構成されている化学物質でできています。そして、化学物質には元々自然にあるものから人間が作り出したものまであります。

もともと自然にある化学物質の例としては、植物でいえば木材のセルロースや、ふぐ毒のテトロドトキシン、鉱石などでは鉄、アルミニウム、金、銀、銅、砒素、水銀、石油などがあります。石綿なども自然にあるものです。

人間が作り出した化学物質ではペットボトルなどに使われている「ポリエチレンテレフタレート（PET）」はプラスチックの一種で、石油を原料とするエチレングリコールとテレフタル酸を反応させてつくります。他にも多くの人工的に合成された化学物質があり、その数は日本の中で使われているだけでも数万種といわれています。

## これからの課題



- ネットワークの強化
- 関心を広げる情報のあり方
- 表示や規格のあり方を考える調査
- 企業報告書の評価活動

ご清聴ありがとうございました。